

杜沢光一郎氏追悼

直言の人

高野公彦

昭和39年、コスモスに入って間もなく、活躍の目立つ若手の作者たちが視野に入ってきた。その中の一人が杜沢光一郎氏であった。

○しゆわしゆわと馬が尾を振る馬として
在る寂しさに耐ふる如くに

特にこの歌がコスモスの人々に愛唱されてきた。昭和33年、二十二歳の若さで
○先生賞を受賞した俊秀であった。

杜沢氏はすでにコスモス編集部の一員で、私も入会後すぐ編集部末席に加わったので、しぜん言葉と交わすようになった。どちらかと言うと無口な人、という印象であったが、口をひらけば直言

の人、それが杜沢氏であった。編集部には奥村晃作氏もいた。

千駄ヶ谷で東京歌会が開催されていたころ、歌会のと宮柁二先生ほか何人かが近くの居酒屋に立ち寄って、飲み会を開くことがあった。私も必ず同席した。

あるとき、酒を飲みながら宮柁二・杜沢光一郎・奥村晃作のあいだで口論が始まった。短歌に関する真面目な論争だっただと思うが、しだいに熱を帯びてきて、三人は交互にテーブルを叩きながらしゃべっている。よく見ると、一人がジャンケンのゲーでテーブルを叩き、次の一人がパチヨキでテーブルを叩き、もう一人がパチで叩いている。

私は酒席で文学的な論争をするのが苦手なので、口論には加わらず、三人のそばで黙って酒を飲みながら、《これは珍しい。まるでゲー・パチヨキ・パチ合戦だ》と思ったことを覚えている。あの時、

ゲーが宮先生で、杜沢氏がパチヨキだったように思うが、確信はない。

このように宮先生と論争することはあった。昭和43年から十年以上コスモスに連載された「宮柁二作品合評」に執筆者の一人として初めから全てに参加したのも、その敬意の表われだろう。杜沢氏の宮柁二論はのちに大著『宮柁二・人と作品』となつて結実する。

第一歌集『黙唱』は昭和51年に刊行された。右に挙げた「しゆわしゆわと」の歌はこの歌集に収められ、より多くの人々に知られるようになった。

コスモス埼玉支部のリーダーとしても長く活躍した。昭和40年代の頃の或る年、杜沢氏の肝入りで秩父の三峰神社で一泊支部歌会が開催され、私も妻子を連れて参加した。ヤマトタケル創建と言われる由緒ある神社だった。

宮英子さん主催の《山西省の旅》に私は何度も参加したが、杜沢氏も夫人（大迫孝子さん）を連れて参加したことがある。山西省のどこかの都市で、皆で昼食を終えたあと、三人だけで喫茶室に行つて談笑した。その時、杜沢氏と夫人の仲睦まじさを私はつくづくと目撃した。いご夫婦だった。しかし夫人は先に亡くなられ、そして今年、杜沢氏も彼岸に渡つてしまった。

○「個人」といふ灯をともせるタクシーが驟雨のなかにまぎれゆく見つ



とざわ・こういちろう

昭和11年、埼玉県生まれ。昭和29年コスモス入会。昭和33年〇先生賞、46年コスモス賞を受賞。歌集『黙唱』『青の時代』『爛熟都市』『群青の影』、評論集『宮柁二・人と作品』など。本年5月25日逝去。

歌集『爛熟都市』の中にこんな歌がある。今ごろ、彼岸の驟雨の中を「杜沢」という灯を点した車がひっそり走っているかもしれない。

きびしくそして幅広い足跡

丹波真人

コロナ禍により、杜沢光一郎さんとはしばらくお会いしてなかったが、今年一月十六日に御自宅の浦和の報恩寺を訪ねた。詠草が届いてないと事務室からの報告があり、ともかくも支部のメンバー三人（金治暁義、田中愛子、丹波）でお伺いした。予想していたよりもお元気そうで一同ほっとしてこの日は辞去した。FAXの単純な操作ミスで送稿できなかつたことも判明したが、この日から四ヶ月後の突然の訃報なので、いささか驚いている。

杜沢さんには、コロナ禍以前には月々の支部歌会の御指導を賜っていて、この事をまず感謝したい。各人の作品を逐一批評していただいたが、杜沢選は高点歌

と重ならないことが間々あった。そして「どうしてこういう作品に票が集まるのか私はこの作品に票を入れた人の見識を疑わざるをえない」との酷評もあつて、一同肩身の狭い思いをしたことも、たびたびあつた。

なお、埼玉支部では五年に一度、杜沢さんの陣頭指揮のもと記念支部報を刊行してきたことも特筆しておきたい。近くは六十五周年記念支部報を令和二年二月一四日に刊行した。これに先立ち宿泊旅行を二一名参加で平成二七年六月二〇・二一日に飯能市の《吾野の竹寺》で行つた事は、まだ記憶に新しい。何しろこの竹寺は、周辺を山々に囲まれていて、深山幽谷の中のたつた一つの寺院なのだ。千年余の歴史をもち、明治期の神仏分離もくぐりぬけ、今なお東日本で唯一神仏習合の遺構がある寺として知る人ぞ知る珍しい寺院である。この竹寺の住職と杜沢さんは僧侶として昵懇の仲らしく、その事もこの旅行の実現に役立ったのである。百歳ちかい高齢ながら大音声で説明される姿には驚くしかなかった。竹寺は竹の子尽しのコース料理が細かな解説と相まって大人気となつてきた。今回は竹

寺と高麗神社双方で歌会をした事も忘れられない旅行となった。

そして、杜沢さんの歌人としての目ざましい業績といえば、第六回日本歌人クラブ評論賞（平成二六）を受賞した『宮柁二・人と作品』と思われる。本書は、いわゆる評伝に見られる歌人の生涯を網羅的に紹介したものではない。多岐にわたる宮柁二作品を「響き」というキーワードによりヘーゲル流の弁証法を援用して解説した点が特にユニークなものといえる。具体的には柁二作品の音楽性に着目して、オノマトペやリフレイン、破調も含めてリズムに言及して論じている点が大きな特徴といえる。明治神宮での授賞式、南国酒家での祝賀会には、埼玉支部の仲間と参列したことも強く印象に残っている。

他に、杜沢さんは短歌を詠むことは元より、声に出して朗唱する点で特に優れていたように思う。全国大会の席で宮夫人の強い求めにより白秋唱歌をいくつか唄うこともあった。また僧侶としても、天台宗開宗千二百年記念和讃を作詞（作曲は山本丈晴）した事も特記しておきたい。さらに晩年には、蜷川幸雄の「ゴ-

ルド・シアター」に参加して俳優を務め、さらに請われて映画にも出演した事は、幅広い才質を充分にうかがわせた。

杜沢先生の左手

朝比奈美子

「杜沢先生」：親しみをこめて私はいつもそうお呼びしてきた。気が短く、正直すぎるほど正直で、齒に衣着せずものを言うので随分と怖い思いもしたが、根の優しい方で、一度でもその優しさに触れてしまうとそう簡単には離れられなくなる——そんなタイプの方であった。

初めてお会いしたのは昭和五十七年三月。氏が四十六歳、私は二十五歳だった。風にひらめく「生徒募集」の旗に誘われて、私はふらふらと、何も考えずに、氏が講師をしておられた「短歌講座」の見学に行ったのだった。

氏は目を大きく見開いて正面から私を見据えられた。そして講座終了後、次のようなことをおっしゃった。

「歌をやったからといって何がわかると

いうものでもないのですけどね。歌をやるとその人に応じたものがわかるのです。興味があるのならやってみてごらんさい」

その三ヶ月後私はコスモスに入会した。昭和六十年十二月、結婚のため東京から千葉県茂原市に移ることにした私は、披露宴のスピーチを氏に依頼した。

「あゝ、いいですよ、いいですよ。結婚式なんてものはね、一つの儀式でしかないだから」

氏は不思議な一言を添えて快諾して下さった。そして当日、私の拙い相聞歌五、六首に寸評を加えて会場を沸かせたのち、「この人は本当に歌の好きな人なのです。どうか結婚後も歌を続けさせてやっていただきたいと思います」とスピーチを結んで下さった。

私は感謝している。この言葉がなかったら今日まで歌を続けてこられたかどうかかわからない。

その後はあまりお会いする機会もなくなってしまったが、氏は筆まめな方で、折に触れてお手紙やお葉書を下さった。後年私が「馬と炎―杜沢光一郎私論Ⅰ・Ⅱ」を書かせていただいた際にも、その読後感を記す長いお手紙を下さった。そ

の一部をここに引用させていただきます。

……それにしても歌の手解きを受けた頃、歌作は自己浄化の精神修養の場の如きものと貴女が思っておられた由をはじめて知り何という見当違いを我知らず押しつけてしまっていたことかたびっくり仰天いたしました。(中略)

私は自分の体験を通して短歌という文学は生半可な気持で近づいてはいけません。自分のすべてをさらす覚悟で先に進もうとしないと身をほろぼすことにもなりかねない。そのの処をしつかり肝に銘じていて欲しいと伝えようとしていたのですが、……

歌人杜沢光一郎の本質をよく伝える文面である。

いつのことだったか、まじまじと氏に左手を見せていただいたことがある。男性にしては色白の手で、五指がすらっと長く、とりわけ薬指の長いのが印象的だった。中ほど三本の指には長く太い毛が数本ずつ生えていて、どの爪も肉に食い込むほど短く切り揃えてあった。今しきりにその手のことが思い出される。

杜沢光一郎作品抄(二十三首)

*自選歌集『青銅時代』より

日本の地つちにその尾を汚しつつ檻かごのなか孔雀は悄然せまげたりき 『青の時代』

どの街もみな貧しくて木枯に鳴る電線張りめぐらせり

吾が十代も今日に終ると地ちにゆるるまろき木洩日踏みつつ帰る

魚野川うのがはに孤り沿ひきてあをく暗く淀めるよど箇所かじょうのあればたたずむ

オールドブラックジョー唄ふ女生徒、老残らうぜんのこころ識しらざるこゝろ柔らかく 『黙唱』

稽古場の裏路うしろみちくれば泣き方のさまざまを習ふなこゑがしてゐる

あたらしきいのちみこもる妻とゐて青き蜜柑をむけばかくはし

しゆわしゆわと馬が尾を振る馬として在る寂しさに耐ふる如くに

われはもとなんのけだものぬめらなる春の夜風をあびつつ思ふ

亡き母に似るといはるる耳たぶにあはれ小春こはるの陽ひがあたたかし

もの持たぬ手のぶらぶらとゆるる手のどくしやうもなき手をさげてゆく

りゆうりゆうとトランペッターの背反せなりてあゝ身み幹みもさながらに鳴る
捨てられし茶碗ちawanの底そこにひかりつつ死水しじゆほどの水たまりをり

街音まちねに打たれつつゆく戦いくさあらば戦に死ぬるは齢はひを生きて 『爛熟都市』

ほのじろく肥えたる人ら地下鉄のエスカレーターにせりあがりくる

百日紅ひゃくにちかの咲ける寂けさ、唐突カウガウに渴仰かつおうの語韻ごひんを愛す

「個人」といふ灯とうをともせるタクシーが驟雨そうこのなかにまぎれゆく見つ

目の前まへにあるのは部分、部分ばかり、部分ばかりの中で物言ものごとふ

メフィストフェレス想おもはする黒犬くろいぬが炎昼えんじゆの地面じめんを嗅かぎつつゆけり

原爆げんばく忌ふたつもつ国くに、椒はしかがの口くちひびくがに蟬鳴せみなきしきる

みづからの靴かかのひびきにつつまれて夜半よなかの団地だんちの階かのぼりゆく

枯れ原かのなかなるレール貨車かすぎてゆきたるのちも長く鳴りをり

ひとつ家いへ壊ならんとしつつその木組きぐみ荒々あしく臭におふ梅雨つゆの晴れ間はを

(抄出II桑原正紀)